

社説

黨員の不平等に足らざる

板垣伯が自由黨の總理より内務大臣の職に就きたるは... 政府と結託云々の實を露する爲めなりしに近來伯の舉動を見れば其椅子に安んじて得意の色あるが如し斯くは結託の實を失ひ黨の面目にも關する次第なればとて黨員等は伯に向て何か勸告する所ある可しとは昨今世上の風説に聞かざるも伯が入閣後舉動の云々は最初より分り切たる成行にして更らに怪しむに足らず

の政界は未だ斯る時機に達せず維新の元老は依然政府の要地を占めて容易に動かすべからず... 伯の地位を授けたるのみ特に怪しむに足らざるのみならず思ふに斯る成行は獨り自由黨のみならず今の民間にて何黨何派と唱へ極力政府に反對して大言壯語を放つものも一旦志を得るの場合には何れも同様にして多数の黨員は恰も外に見捨てられて失望の境遇を見るものと疑ふ可らず愚者の智者に役せらるるは人間社會の常にして本來の約束如何とす可らざるものなれば自由黨員たるものも今更ら勸告云々を野暮の舉動を止めしむ自らから智恵の足らざるを悟りて自ら思ひゆるの外なかる可し

○ブランド氏、支那の外務顧問となる

項の外國電報に據れば北京駐劄獨逸公使たりしブランド氏は今度總理衙門の外務顧問に聘せられ殊に其待遇は大に準ず可しと事の眞偽未だ俄に判するを待たざれば若し果して事實ならんには是れを即ち直接には總務司として支那政府に重き置かれ外交の事は大抵その相談を受けざるもなきサロバートハート那に及ばず權力のますゝ衰微する前徴として見る可し同國人の身に取りては誠堪へ難き次第にして畢竟英國政府の外交政策の軌道に流れて武蔵桃源の春夢を貪りたるに耽由するなれば此事を見ては流石に其夢を覺悟するなる可く又覺悟せざる可からずと憤慨する者ありと云ふ

○クリート嶋の虐殺

本日のロイテル電報に據ればクリート嶋のカニア府に駐屯する土耳其兵は耶蘇教徒の財産を奪取せしむのみならず虐殺を行ひしと抑も如何なる原因ありて斯る無残の暴行を演ずるに至りしか電文簡にして未だ之を詳にするを得ざれば彼のアルメニア事件は今に尙ほ落着かず殊に歐洲の天を蓋ふにも拘らず又も此事起りては最早や列國も黙するに忍びず或は一大禍麻の生ぜざるを保し難ければ今後の成行も注意を怠る可からずと云ふ

○分營設置に對する苦情

今度軍備擴張の爲め各地に兵營を新設する事となりたるに就ては地所の買上り山師の棄すありて随分困難を感ずるならんとは當初當局者の心配する處なりしも實際に至りては即ち然らず各地の人士競みて其地に營所の設けらるるを企望し土地の賦納、人夫の寄附など力のあらん限りを盡して運動する風潮となりければ陸軍の當局者は土地買上りに關し意外の便利を得たれば之に反して各府縣の知事は多少の困難を感ずるに至れり云々今其次第を聞くに兵營新設の運動には第一に知事の力を藉るものとされども運動の功を奏すべきに非ず時として有志者の奔走も知事の助力も水浴に歸する事あり斯る場合に以て人氣の立ち易き習として事成らざれば知事の力難ざる所ありとて其の不平等を地方官に洩らすの風あり現に福井縣下牧野に該國本部の設置あるべしと云ふを聞き福井市にては其内の一職を同市附近に分遣されんものと企望し市會議員等々上京して非常な運動せしめ同市は福井に衛生上不適當なりとて同市を

距る三里程の地に分校を設置する事に内決したりと聞き市會議員を始め土地の有志者は失望と憤怒に堪へず果ては市會に於て知事の不信感論を喋々するに至れり今や各地兵營設置企望の熱は削じれば其望を達する能はざる地方には今後斯類の苦情は絶えざるべく地方官の迷惑なからざるべしと云へり

○松方伯の歸京

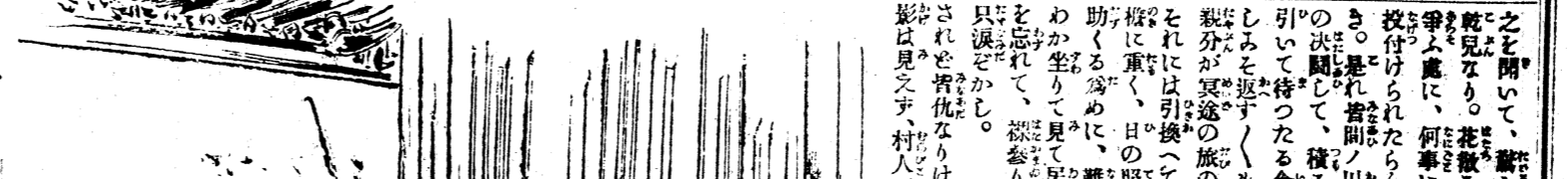
過般鄉里鹿兒嶋に赴き歸途九州京阪地方を周遊せし松方伯は一昨夕九時歸京したりに昇任されたる大山樞介氏は過般前任地嶼國より歸朝後養病の爲め旅行中なりしが此程家族を擧げて鎌倉の別邸に移り同地に在りて保養する由なり

○殘酷なる誤殺

本所區小梅葉平町の木賃宿今西モ方の天井低く薄暗き座敷の片隅に鐵より寒き蒲團を頭より引被り病は重けれども醫藥の手當あるにもあらず誰れ看護りして呉れるものなき床の中に呻きを擧げて悶へ苦しむは下谷龍泉寺町の遠藤三吉とて四箇月程前より同家に宿りて一日三錢の木賃を拂ふべき約束の病に妨げられて心に任せずモの亭主山本治七より催促を受ける毎に重き枕に顔を擧げて拜む許りに涙を流し詫いふて言譯いふて頼みし未去る二十八日の朝に拂はざれば出行くに定めたりしが其日になりて尙ほ拂ふべき的もなく如何せん三吉が苦心の程を思ひやりて同宿の小川修正といふもの仲裁に入り兎角正午十二時まで延期したりしに病中の枕元へ金の降來る筈もなければ又も在在となりて其夜も早や十時過ぎ治七は近隣の華商小林某方の振舞酒に泥酔となつて歸り來り三吉を見るや忽ち膝と眼を刺出し無慘にも寐て居るものを引起して月外へ引擲出せる際三吉は柱及び上樑へ頭面部の撞ひなく打付けられ皮破れて鮮血迸り左なきだに病苦の身の何條以て堪るべき、ノタ打ち廻る勢もなく遂に其儘即死したり事の意外に治七も驚き爲す術もなくありし處へ地方裁判所よりは豫審判事、検事、警官、醫師等出張して検視を遂げ死體は同裁判所にて解剖するものとになり犯人山本治七は直ちに逮捕せられて目下本所警察署にて取調中なり元來治七は憐愍の心深き人なりしに何故に今回は斯る手荒き所爲に及びしやと近所の人々は語り居るぞ

押風

第三十六回 あそは 左りては、蛇の穴より幾の出でし程の不思議な、斯くまでも人は虚儀ものか、と知事が押風を庇護ふの心は淡くも消えつ、只面憎しの念ぞ、幻の如くに覆れるける。 素より確としたる證據のあるにも非ず、大概の推察と認定によりて裁かれたるその頃の習は、探偵の信用に六分の頼みかけたりしに、今將た眼前に押風の事件を見ては、淺ましう興も醒め果てしその助けんと企てたる井上村の罪人は、いよゝ一點の疑ひなきに決まりけん、今は猶豫すべきにあらず、と改めて處刑の日も定められ、押風は罪輕きに似たれど、假初ならぬ大罪が死體を紛失せし曲者、それを白状させて後、同じく絞首に執行せしめて、日毎の拷問は數々の責難、責を割つて絶の熱湯をそそぎ込まれ、肉は破れ血は流れて、おはれ光々とした押風、見る影もなく寒果れてぬ、と専ら風評、遠近に喧し。



之を開いて、驚き... 花散る... 何事にも... 折から奥の間に四五... 一ふれは飛たるとな... 折から奥の間に四五... 一ふれは飛たるとな... 折から奥の間に四五... 一ふれは飛たるとな...